識別番号　P18

研究課題　グローバル化時代のラテンアメリカ地域研究と教育

研究代表者　堀坂浩太郎（イベロアメリカ研究所・外国語学部ポルトガル語学科）

共同研究者　長谷川ニナ（外国語学部イスパニア語学科）
幡谷則子（外国語学部イスパニア語学科）
今井圭子（外国語学部国際関係副専攻）
岸川　毅（外国語学部国際関係副専攻）
三田千代子（外国語学部ポルトガル語学科）
ネーヴェス、マウロ（外国語学部ポルトガル語学科）
大越翼（外国語学部イスパニア語学科）
田村梨花（外国語学部ポルトガル語学科）
谷洋之（外国語学部イスパニア語学科）
トイダ、エレナ（外国語学部ポルトガル語学科）

Summary　The research project (Latin American Studies and Education in the Global Era) seeks to follow recent developments in Latin American studies under the globalization phenomena and to apply its findings to education.

１．研究の目的

グローバル化はラテンアメリカ諸国の置かれた状況にさまざまな影響を及ぼしているだけでなく、地域研究の課題や方法論、研究者集団の構成などにも少なからず変化をもたらしている。当然のことながら、それは本研究所所員が直接関わる外国語学部（イスパニア語学科、ポルトガル語学科、国際関係副専攻）およびグローバル・スタディーズ研究科の教育内容にも変化を及ぼしかねない。このため研究員を順次、それぞれの研究フィールドや国際学会に派遣し、テーマに即した個別研究を進めるのと合わせて、地域研究としてのラテンアメリカ研究の最新動向を把握するともに、教育に有用な情報収集を図ることを目的としている。

２．研究の方法・内容と共同研究員の役割分担

研究の方法・内容は、現地調査を担当する所員によって異なる。2007 年以降、現地調査を実施した 5 人の事例を示すと以下のようになる。

◆ 2007 年 3 月　岸川毅　　アジア諸国におけるラテンアメリカ地域研究と教育―台湾および中国を事例に―
調査先：淡江大学（台北県）、政治大学（台北市）、国家図書館（台北市）等

◆ 2007 年 7 月　長谷川ニナ　　第 18 回国際比較文学学会年次大会（リオデジャネイロ市）およびアルゼンチン、メキシコ出張
調査先：同上学会ワークショップ、メキシコ自治大学（メキシコ市）、サルバドル大学（ブエノスアイレス市）、ブエノスアイレス大学（同）、アルゼンチン国立図書館（同）等。

◆2008年3月　大越翼　　第73回アメリカ考古学協会年次大会（バンクーバ）およびメキシコ出張
調査先：年次大会での発表、メキシコ自治大学付属文献学研究所（メキシコ市）等

◆2008年8月　トイダ、エレナ　第1回ポルトガル語研究世界シンポジウム（サンパウロ）およびサンパウロ出張調査先：シンポジウムでの発表、Grêmio Haicai Ipê（サンパウロ市）等。

◆2009年2月　谷洋之　　革命100周年のメキシコにおける国民アイデンティティ再編に関する考察
調査先：革命博物館（メキシコ市）、ケレタロ地域博物館（ケレタロ市）、イダルゴの家博物館（イダルゴ市）、グアダラハラ大学（グアダラハラ市）

今回、ポスター・セッションで発表するのは、ポルトガル語学科のトイダ准教授が実施したブラジル・サンパウロでの日系人およびブラジル人の間で詠まれているポルトガル語俳句に関するものである。

３．研究の成果

研究成果は研究報告会ないしは研究所員を対象に毎月1回開催しているランチタイム・フリートークでの報告および、研究所紀要『イベロアメリカ研究』、研究所モノグラフ・シリーズ等への執筆のかたちで行われている。トイダ准教授の研究成果の一部は「ブラジルにおける俳句の歩み―『桜の花』から『イペーの花』へ―」（『イベロアメリカ研究』第30巻第1号）という形で発表されている。

４．ブラジルにおける俳句、二つの流れ

昨年（2008年）は、日本人のブラジル移住100周年であった。

移住するということは、基本的に移住先の文化を受け入れ、それを自国の文化とうまく調和させていくことである。またそのプロセスの中で、自国の文化を以ってどのような貢献ができるかを、意識的でないにせよ、模索することではないだろうか。ブラジルにおける日本人の貢献は、まず農業に関するもので野菜や果物、花の栽培から始まり、スポーツ（柔道、野球、剣道）、そして文学活動の分野でもみられるのである。

では文学の世界ではどうなのか。

ブラジルにおける俳句の紹介は二つの流れから成ると通常言われている。

俳句が初めてブラジルに紹介されたのは、20世紀初頭にヨーロッパで盛だったジャポニズムを通してである。アフラニオ・ペイショットがフランスのポール・ルイ・クーシュウのフランス語で書かれた作品と出会い、それをブラジル文壇に紹介したのが最初の流れである。

時期をほとんど同じくして、ブラジルは日本から移民を多数受け入れている。この中に、もう一つの俳句普及の流れをつくる高浜虚子の弟子、佐藤念復がいたのである。もちろん日本語を理解する人々に限られていたのが、この流れは後にポルトガル語で創作するhaicaiとなって新しい流れを作ることになる。

ブラジルにおける俳句の二つの流れは、その社会に日本文化を紹介する重大な役目を担い、新たな流れをつくりあげた。「桜の花」（＝俳句）はブラジルの大地に植えられ、根をおろし、枝葉を広げ、そして「イペーの花」（＝haicai）を咲かせたといえる。100 年のときを経て、俳句は日伯間の一つの大きな共有財産となり、日本語であれ、ポルトガル語であれ、これからも人々を魅了し続けていくだろう。ブラジルの haicai 人口が確実に増えていることは各地に haicai 同好会ができていること、ブラジルだけでなく日本に向けての投稿者数が多いことからもうかがえる。これからもブラジル独特の世界を詠む作品が、独自の季語を駆使することで、作られ続けるだろう。

ラフカディオ・ハーンの定義の中に、「日本人は上流階級も庶民もすべて」俳句をつくるとあるが、この事実は日本人にとってまさに幸運だったとしか言い様がない。移民という過酷な条件下にあった人々は、17 文字の小宇宙を自由に作りながら、日々の苦渋を浄化することができたのである。

（トイダ、エレナ・H・「ブラジルにおける俳句の歩み―「桜の花」から「イペーの花」へ―」『イベロアメリカ研究』第 30 巻第 1 号からの抜粋）